

長沢白鳳(ながさわはくほう)

登録番号：第924号

育成者：長沢猪四重

登録年月日：昭和60年7月18日

来歴：「白鳳」の枝変り

登録者：櫛形町農業協同組合(山梨県
中巨摩郡櫛形町小笠原455)

特性

■栽培特性

樹勢や樹の大きさは中程度であり、樹姿は中～やや開張性である。葉芽や花芽の着生は良好で複芽が多いから、栽植距離や整枝せん定など、樹の取扱いはほぼ白鳳に準ずればよい。

開花期は甲府盆地で4月上旬、白鳳より1～2日早い。花粉は多いので人工受粉の必要はない。

生理的落果は少ないが、若木時代に収穫前落果が若干みられる。これは果実の梗あが少し深いので、結果枝の発育がよいと果実の肥大に伴い、果実と結果枝が押しあって落ちる。したがって、樹勢を早く落ちつかせ、結果枝としては短果枝を主体に利用するのがよい。

本品種は裂果がほとんどないので無袋栽培が可能であるが、果面の着色が濃いので暗赤色に着色しやすく、これを嫌って有袋栽培にする場合も多い。

熟期は甲府盆地で8月上旬頃、成熟日数は満開後111～120日の範囲にあるが、着色が早くから全面にくるので、収穫期を色だけで判断すると果肉の硬い未熟果を収穫することになる。日持ちがよいので収穫をあせることはない。しかしあまり遅くまでおくと果肉内の着色が多くなり、甚だしい場合は品質も低下する。したがって適期収穫を心がけることが本品種では特に重要である。

なお、本品種の普及当初、高接ぎをすると赤色果がでる傾向があり、また未熟果でも果肉内の着色が甚だしく、品質の悪い樹が認められた例が報告されたが、栽培条件に関係なく赤肉果が多発するような場合は、その樹は淘汰するほうがよい。

■果実特性

果形は円～扁円形で、果頂部は僅かに窪み、梗あいの深さはやや深い。果実の大きさは大で280～320gぐらいになり、玉揃いはよい。

果皮の地色は白。着色はぼかし状で容易に全面濃赤色となる。

果肉も白で果肉内や核周囲の着色は少～中であるが、収穫が遅れるほど多くなる傾向がある。肉質は溶質で多少ゴム質に近い。甘味は多く糖度計で13～14度あり、酸味は少ない。渋味や苦味もなく食味は良好である。

果実の日持ちは樹上でも、収穫後でも同時期の他の品種よりよい。

核は粘核で、核割れはほとんどない。

■病害虫抵抗性

灰生病に対しては比較的強いようである。その他の病害虫に対しては他の品種と比較して大差ない。

■地域適応性

土壌その他に対する適応性は広い方で、やせ地でも比較的玉張りはよい。

平成3年度の山梨県における栽培面積は未成園が多いが推定で70ha、生産量は800t近いとみられ、モモ全体の栽培面積が伸び悩む中で、「山根白桃」等に代わって栽培しやすい高品質品種として増加傾向にある。

(山田喜和)